

とちぎ 米麦改良

平成25年5月
第96号

(公社)栃木県米麦改良協会
宇都宮市本町12-11
☎(028)626-2182



良質種子生産への期待

栃木県農政部経営技術課長 和田 浩 幸

本県農政の推進につきましては、日頃から御理解と御協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

今年度から経営技術課長に着任いたしました和田です。関係者の皆様にはよろしくお願いたします。

さて、県では平成23年度からの5か年計画「とちぎ農業成長プラン」に基づき、本県農業の新たな魅力と価値を創造する「進化する農業・栃木」を目指し、7つの重点戦略を掲げ、農業者の皆様や関係機関団体各位とともに、各種の施策を推進しているところです。

特に農地の8割を水田が占める土地利用型農業においては、水田経営とちぎモデルと人・農地プランの一体的推進により担い手の確保・育成を図るとともに、より収益性の高い農業の実現に向け規模拡大に加え複合化・6次産業化等に取り組んでまいりました。

これらの取組を推進する上では、高品質・多収で安定した稲・麦・大豆の生産がこれまで以上に重要となりますし、その基礎となる種子の安定的かつ十分な供給量の確保が不可欠であり

ます。

このため県では、平成24年に「優良種子生産の手引き」を見直し「商品としての種子生産」を行うためのノウハウをさらにわかりやすくとりまとめました。さらに、平成25年3月には水稻種子の異種混入防止対策チラシを作成配布しましたので、種子生産者や指導者の皆様方にはぜひ熟読していただきたいと存じます。

本県の水稲の種子更新率は、皆様方の御努力により年々向上しております。一方大豆については、消費者や実需者からの信頼性を確保するには、より一層高い種子更新率を維持することが必要です。農家の皆様からは良質な種子の供給を強く望まれていますので、これらの期待に応えるため、手引きに基づく生産管理の徹底をお願いします。県としてもそのための適切な技術指導に万全を期してまいります。

最後に、良質種子生産に対する関係者の皆様方のなお一層の御理解と御協力をお願いいたします。

水稻「なすひかり」から「コシヒカリ」「あさひの夢」に作付転換する場合の注意点について

栃木県農政部経営技術課

25年産において「なすひかり」から「コシヒカリ」「あさひの夢」に作付を転換する場合は、次の点に注意してください。

おける普通植「あさひの夢」は、生育期の気温が低めの場合には登熟不良を起こす可能性があるため、特に注意が必要です。

1 品種選定

◇低温による登熟不全と収量低下のリスクを回避するため、各地域における出穂期晩限、耐倒伏性や耐病性を考慮して作付けする品種を選定してください（表1、2、3）。北部に

◇稚苗晩限以降の移植には中苗（4葉苗）を使用してください（表2、4）。この場合、稚苗より育苗期間が長く、気温も高く経過するので、苗が徒長し、病気が発生しやすくなります。温度管理、かん水量には十分注意してください。

表1 品種特性

品種名	移植期	出穂期	成熟期	耐倒伏性	耐冷性	葉いもち	縞葉枯病	玄米重/a
コシヒカリ	5月上旬	8月1日	9月14日	弱	極強	弱	弱	60.5
あさひの夢		8月10日	9月30日	極強	—	やや強	極強	65.8
なすひかり(参考)		7月28日	9月10日	中	極強	中	弱	61.8

注) 農業試験場本場(宇都宮市)におけるデータ

表2 稚苗及び中苗の移植時期

	早限	適期	晩限	中苗晩限	出穂期晩限
北部	4月末～5月初旬	5月上旬～中旬	6月10日頃	6月17日頃	8月20～25日
中部	4月25日頃	5月上旬～中旬	6月15日頃	6月22日頃	8月26～31日
南部	—	5月上旬～6月上旬	6月20日頃	6月27日頃	8月26～31日

注) 晩限(稚苗、中苗)の収量は適期の9割程度

表3 各品種の作期別出穂期及び成熟期の目安

地域	品種名	作期	5月					6月					7月					8月					9月					10月					
			1-5	6-10	11-15	16-20	21-25	26-31	1-5	6-10	11-15	16-20	21-25	26-31	1-5	6-10	11-15	16-20	21-25	26-31	1-5	6-10	11-15	16-20	21-25	26-31	1-5	6-10	11-15	16-20	21-25		
北部	コシヒカリ	早植																															
		普通植																															
	あさひの夢	早植																															
		普通植																															
なすひかり(参考)	早植																																
	普通植																																
中部	コシヒカリ	早植																															
		普通植																															
	あさひの夢	早植																															
		普通植																															
なすひかり(参考)	早植																																
	普通植																																
南部	コシヒカリ	早植																															
	あさひの夢	早植																															
		普通植																															
なすひかり(参考)	早植																																

■: 移植期 ▨: 出穂期 □: 成熟期

表4 普通植における中育苗苗法

播種量 乾籾 g	1箱当り 基肥量 g			追肥窒素 g	育苗日数	10a当り使 用苗箱数
	窒素	りん酸	加里			
80～100	0.8	4.0	3.0	1.0	26～30	24～26

注1) 追肥は播種20日後に所定量の窒素を箱あたり1Lの水に溶き、かん水時に行う

注2) 使用苗箱数は栽植密度22株/㎡を想定

2 施肥窒素量

◇作期、ほ場の肥沃度等に応じ、転換する品種に適した窒素量を施用してください(表5)。

◇「コシヒカリ」「あさひの夢」ともに全量基肥施肥栽培の場合は、地域の5～7月の積算気温から適正な被覆尿素肥料の種類・成分量を選択し、使用する銘柄を決定してください。窒素量は分施体系における総窒素量の7～8割程度とします。

◇「コシヒカリ」の早植栽培(分施体系)にお

いて、移植を5月中旬に行う場合は程が多少伸びることを考慮し、基肥窒素量を2割程度減肥してください。

◇「コシヒカリ」は、堆肥を連年施用しているほ場で作付けする場合は、基肥窒素量を減らし、生育に応じて追肥で対応するなど、地力窒素を考慮した肥培管理を行ってください。

◇「コシヒカリ」「あさひの夢」ともに標高350 m以上の分けつの確保しにくい地域では、窒素成分で1 kg/10a程度増肥します。

表5 分施体系における品種別施肥窒素量 (kg/10a)

	地域・作期	基肥	追肥	総窒素量	追肥時期
コシヒカリ	北部・早植	3～4	3程度	6～7	出穂15日前
	中部・早植	2～3	3程度	5～6	出穂15日前
	南部・早植	2前後	2～3	4～5	出穂15日前
	普通植	1～2	2前後	3～4	出穂15日前
あさひの夢	全域・早植及び普通植	5～6	3～4	9～10	出穂20日前
なすひかり(参考)	中北部・早植	4～5	3程度	7～8	出穂20日前

3 移植・管理

◇収穫作業が一時期に集中して適期収穫が難しくなることがないように、移植時期の早限～晩限の間に田植えを分散させて出穂期をずらすようにしましょう。分散の程度は、出穂期の遅い地域、山間田や水利条件など、地域の実情を考慮し設定してください。

◇「コシヒカリ」「あさひの夢」は「なすひかり」ほど疎植栽培に適さないので、栽植密度は20～22株/㎡(一株植付本数は3～5本)を確保してください。

◇移植後1か月程度で必要茎数がほぼ確保されたら、水管理は間断かん水を基本とします。ただし「コシヒカリ」の場合、初期生育が過剰であれば早めに間断かん水に移行し、生育量に応じて強い中干を行うなど、倒伏させないための水管理を実施してください。

◇収穫時期は、同時期に植えた「なすひかり」より「コシヒカリ」で4日、「あさひの夢」で20日程度遅れることが想定されるため、帯緑色籾率及び登熟積算気温による適期収穫に努めてください。

水稲新品種「とちぎの星」の施肥窒素量について

栃木県農政部経営技術課

1 24年産「とちぎの星」における施肥窒素量の検討

栃木県農業試験場が開発した水稲の新品種「とちぎの星」は、平成24年2月に県奨励（認定）品種に指定されました。本品種は、中生の良食味で縞葉枯病抵抗性を有し、高温登熟に優れており、県中南部を中心に23年産から普及を推進しています。

現地導入が始まった23年は、県内9JAにおいて49か所（約17.5ha）で作付けされました。しかし、「あさひの夢」と同程度の窒素量では倒伏が多くなり、「あさひの夢」より窒素量をやや少なくすることがポイントと考えられ、農

業振興事務所では展示ほを設置して、現地で最適な窒素量について検討しました（表1、2）。その結果、目標とする収量を確保するためには、「あさひの夢」よりやや少ない基準量をベースに、ほ場の条件により窒素量を増減することが基本と考えられました（表1、2）。

表1 「とちぎの星」目標収量構成要素（23年暫定値）

	早植	普通植
収量(kg/10a)	630	570
穂数(本/m ²)	420	360
一穂粒数	75	75
m ² 当たり粒数	32,000	27,000
登熟歩合(%)	80~85	85~90
玄米千粒重(g)	24.0	24.5

表2 展示ほの結果（24年）

作型	場所	窒素施用量(kg/10a)			収量 kg/10a	穂数 本/m ²	総粒数 百粒/m ²	検査 等級
		即効性	緩行性					
早植	宇都宮市	7.0	3.5	3.5	632	387	313	1
	那須烏山市	6.0	3.5	2.5	701	414	297	1
普通植	栃木市	4.5	2.5	2.0	590	384	298	1
	足利市	4.8	2.8	2.0	554	383	289	1

※ 施肥体系は全量基肥

2 25年産における施肥窒素量（暫定値）

24年度の試験場における試験成績、現地展示ほの結果を踏まえ、25年産における施肥窒素量を定めました。これまでと同様に「あさひの夢」よりやや少ないことがポイントですが、早植の場合はさらに窒素量を少なくすることが可能と考えられます（表3）。

本品種の26年産における作付目標は1,000haです。24年産の結果が良好だったことから、25年産は目標の200haをクリアする予定ですが、1,000haまで拡大するためには、生産者、関係者が一体となって普及に取り組むことが必要

です。不明な点は農業振興事務所等にご相談いただき、品種の特徴を十分理解した上で、それを引き出す栽培を皆様をお願いいたします。

表3 窒素施肥基準（暫定値）

作期	施肥体系	基肥 kg/10a	追肥 kg/10a	追肥時期
早植栽培	分施肥体系	4.0~5.0	2.0~3.0	出穂前 20~18日
	全量基肥	4.9~6.4	—	—
普通植栽培	分施肥体系	3.0	2.0~3.0	出穂前15日
	全量基肥	4.2~4.8	—	—

※追肥にはNK-202またはNKS-500の使用を想定

※全量基肥の窒素量は分施肥体系の7~8割

大豆新品種「里のほほえみ」の栽培上の留意事項

栃木県農政部経営技術課

「里のほほえみ」は平成23年に県の奨励品種（認定品種）として採用された新品種です。

平成25年産は県内で約140haの栽培を予定しており、今後実需者への積極的な働きかけを行いながら普及推進を図っていきますので、品種の特性を理解し適正な栽培管理をお願いいたします。

1. 栽培特性

「里のほほえみ」は「タチナガハ」に比べ以下のような栽培特性です。

- ①開花は1日早く、成熟期は同程度。
- ②青立ちしにくく、難裂莢性である。
- ③最下着莢位は高く、分枝がやや広がりやすく、倒伏抵抗性がやや劣る。
- ④「タチナガハ」同様にシストセンチュウに弱い。

2. 栽培上の留意点

(1) ほ場の選定

「タチナガハ」同様にダイズシストセンチュウに弱いので、連作を避け田畑輪換を基本とします。また、排水の良好なほ場を選定するとともに、水田転換畑1年目や排水の悪いほ場では、深耕や心土破碎、畝立て同時播種栽培を行きましょう。

(2) 播種作業

「里のほほえみ」は、やや疎植にすると多収となる傾向があるので(図1)、播種量は「タチナガハ」より少ない3.8～4.4kg/10aが適しています(畦幅60～70cm、株間15cm)。

適正な播種時期は、「タチナガハ」同様6月中旬～7月上旬です。なお、地力の高いほ場では6月中旬播きで倒伏の恐れがあるので注意しましょう。

(3) 中耕・培土

「里のほほえみ」は倒伏抵抗性がやや劣るので、十分な培土を必ず行います。

中耕は播種後20日頃に、培土はその7～10日後に行います。中耕・培土が遅れると生育に影響が出ますので、遅くとも開花1週間前までに終了しましょう。また、培土した土が茎まで覆う「山型」にし水が溜まらない

ようにしましょう(図2)。

(4) 病害虫防除

「里のほほえみ」は、葉が大きく株全体を覆うようにして葉が展開するため、害虫の被害を受けやすく、また病害も発生しやすい傾向がありますので、適正な病害虫防除を必ず実施しましょう。

(5) 収穫作業

「里のほほえみ」は裂莢しにくいため、早刈りすると、莢と子実が分離しないことがあるので注意が必要です。なお、刈り遅れでは、しわ粒や皮切れ粒になる危険があります。

また最下着莢高が高いので、刈取り高さ10cm以上を確保して汚損粒防止に努めましょう。

平成24年度の「里のほほえみ」は現地において約18ha栽培され平均単収は約290kgと、県内大豆の平均単収を大幅に上回りました。

今年度も上記のことに十分に留意し、「里のほほえみ」単収300kgを達成し、儲かる大豆作の実現による産地復活を目指しましょう。

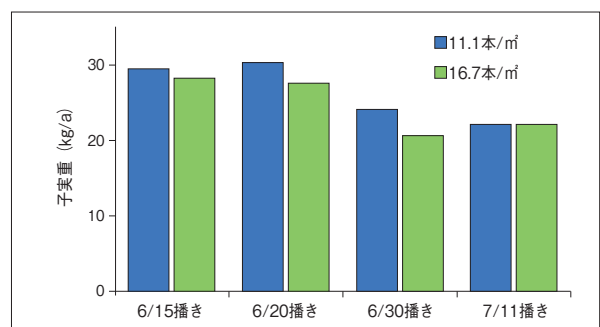


図1 栽植密度別の子実重比較
品種：里のほほえみ（平成23年度，農業試験場）

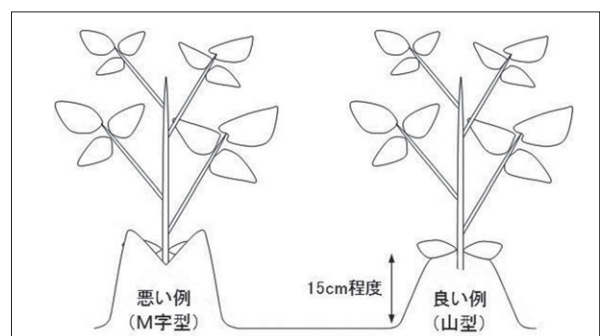


図2 培土の方法

出芽に及ぼす水稻種子の備蓄条件と浸種温度の影響（中間報告）

全農とちぎ 技術参与 山口正篤

春先の水稲育苗期になると、種子の発芽不良などのトラブルが報告されます。販売している種子は事前に発芽率が90%以上であることが確認されており、発芽能力には問題がありません。それでも、発芽不良になるのはどうしてでしょうか。この原因をさぐるために、シャーレでの発芽試験ではなく、いろいろな条件で出芽試験を行いました。出芽試験とは、通常の育苗と同じ 浸種→催芽→出芽（育苗器）を行って、出芽率を調査したものです。

材料として低温条件（15℃）で1年間備蓄した種子（低温備蓄種子）、常温で1年間備蓄した種子（常温備蓄種子）、当年産種子（平成24年産、消毒および未消毒種子）を用いました。その上で浸種温度を7℃と10℃の2段階、浸種期間を7日、10日、13日の3段階とし、催芽は32℃で18時間、出芽は育苗器を用いて30℃、2日間としました。出芽率は育苗器から出した直後の調査で、実際の育苗ではその後に遅れて出芽している種子もあります。（早く出芽した、苗として十分生育する種子数を調査しました。）

● 常温備蓄種子は使えるのか？

常温備蓄種子は、浸種を十分行っても出芽率が劣ります（図1）。シャーレ上の発芽試験では85%程度発芽しましたが、実際の育苗ではこのように出芽率が低下しました。常温備蓄でも条件によりますが、前年に使い残した種子を常温で放置しておいた場合は使わない方が良いでしょう。

低温備蓄種子は、休眠が完全にあけているため当年産種子よりも出芽率が高い傾向があります。低温備蓄種子の出芽率は高く安定しています。

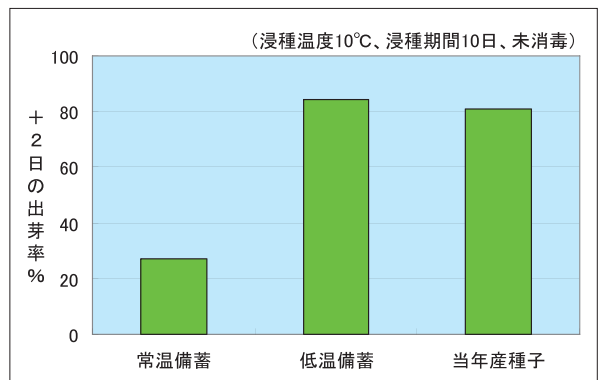


図1 備蓄条件と苗の出芽率

● 浸種温度が低いとどうなるか？

浸種温度が7℃と低い場合には、出芽率が低下します（図2）。この低温浸種による出芽遅れは、低温備蓄種子よりも当年産種子で多く見られました。当年産種子は休眠が完全にはあけていないためと、昨年の登熟期間が高温であったせいと考えられます。浸種温度を7℃（水が冷たかった状態）では、浸種期間を長くとっても出芽率が劣りました。

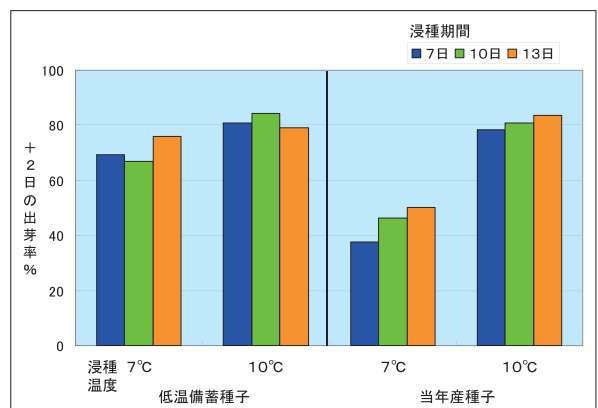


図2 浸種温度・浸種期間と苗の出芽率

浸種温度は、指針にあるように必ず10℃以上確保しましょう。

● 当年産消毒種子の浸種期間は何日必要か？

当年産種子にはテクリードCを吹き付け処理した消毒種子があります。消毒種子と未消毒種子では出芽率の差があります（図3）。浸種温度を10℃にした場合、未消毒種子の浸種期間は10日間、消毒種子は13日間で実用上問題とされない程度に出芽しています。つまり未消毒種子で積算水温（浸種温度×浸種日数）は100℃、消毒種子で130℃必要なことが確認されました。消毒種子は長めに浸種しましょう。

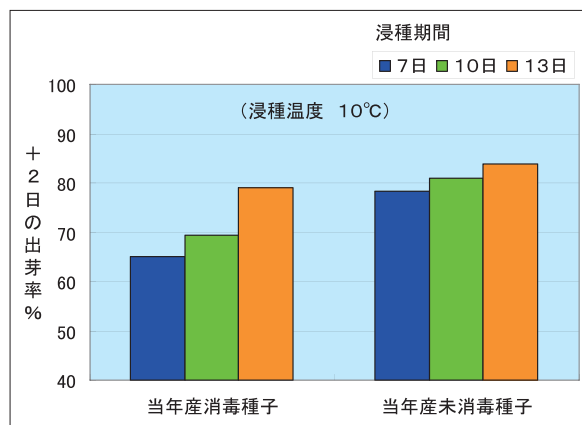


図-3 当年産消毒種子の浸種期間



平成 25 年度事業計画

公益社団法人栃木県米麦改良協会

I. 事業方針

農業を取り巻く環境は、東日本大震災及び原発事故による被災からの復旧・復興・風評被害等あって引き続き厳しい状況となっています。

また、TPPへの交渉参加問題では、参加となれば農業に大きな打撃を与えることは明らかであり断固阻止しなければなりません。

一方、世界的に食糧の確保が重要となっている中で、国民生活に不可欠な基礎的食糧（米・麦・大豆）の国内自給率を向上させ、安全・安心を合わせて提供していくことが求められています。

こうしたなかで当協会は、優良種子の供給とおし、本県生産者が持続的に良質な主要農産物を生産し供給することによって農業経営の安定と向上が図られることを目的に平成 25 年度事業に取り組んでまいります。

良質な農作物の生産と品質改善対策事業では、技術指導資料の作成配付や栽培講習会等への助成事業、受検対策などこれまでの事業を継続実施します。このなかで、「雑草イネ」の進入防止対策に取り組めます。

優良種子の生産と安定供給事業においても、従来事業の継続実施としますが、新たな動きとして水稻の新品種「とちぎの星」、二条大麦の新品種「アスカゴールデン」、大豆の新品種「里のほほえみ」に期待が寄せられており、県の生産振興計画に則して、これらの種子生産計画を進めます。また、種子生産の工程調査や生産者組織の実態調査を実施し、優良種子生産と種子生産体制強化のため課題を抽出して対策を講じます。

当協会は、平成 25 年 4 月 1 日より公益社団法人に移行します。事業活動内容の公益性はもとより会計収支の均衡が求められます。その関

連で特別会計の残量処理と事故処理について、平成 25 年度は費用の収受を中止しストックで対応します。

II. 実施事業

1. 良質な農作物の生産と品質改善対策事業

「栃木県稲麦大豆安定生産推進会議」が打ち出す生産振興方針と栽培技術指針を推進するため、以下の事業を実施します。

(1) 技術指導資料の作成配付

農作物の病虫害や気象変動等による減収や品質低下を抑えるため、県・関係機関の指導を得て、適切な技術指導資料を作成・配布し、生産者に活用していただきます。

主な実施事業

- ①種粃浸種の留意事項のチラシ
- ②米麦の適切な収穫・乾燥・調製指導チラシ
- ③大豆紫斑病防除対策資料
- ④農作物奨励品種特性表
- ⑤雑草イネ対策資料
- ⑥その他有効な資料

(2) 栽培技術・品質改善対策

安全・安心で高品質・良食味の農産物を生産するため、地域の生産者を対象に地方農業振興協議会が実施する各種講習会に助成します。また、生産者のみならず一般消費者に対しても生産技術情報などをホームページに掲載します。

主な実施事業

- ①米・麦・大豆品質改善講習会実施要領に基づく助成
- ②品質改善指導資料の作成配付
- ③新品種の普及促進
- ④協会機関誌とホームページによる情報提供

(3) 受検対策と物流合理化

栃木米品質の高位平準化と円滑な受検の実施

を目的に受検対策会議で県下統一を図ります。
また、物流合理化としてフレコン流通促進を支援します。

主な実施事業

- ①米受検対策会議
- ②受検指導資料の作成配付
- ③共乾施設利用促進対策の支援

2. 優良種子の生産と安定供給対策事業

主要農作物生産の基礎となる優良種子の生産と安定供給を目的に、種子生産者と採種ほ面積の確保、種子生産の指導、種子の審査と検査、種子の買入と安定供給、備蓄、残量処理・事故処理、種子生産体制の強化などの事業を実施します。

(1) 種子の生産

事前予約された需要数量を基本に、流通動向、新品種の振興計画、備蓄数量などを勘案して県・関係機関と協議の上「種子生産計画」を策定し種子の生産に当たります。

主な実施事業

- ①奨励品種の許諾契約
- ②種子生産計画の策定
- ③指定種子生産者と採種ほ場面積の確保
- ④新品種の種子生産拡大

(2) 生産指導と品質管理

種子生産ほ場での生育状況および生産見込数量などを的確に把握するため現地調査に参画し、併せて関係機関の協力の下、種子生産技術向上のための栽培講習会や下見研修会などを行い、優良種子を確保します。

また、平成24年産種子に起こった混種事故対策を最重点事項として取組み再発防止に努めます。

主な実施事業

- ①ほ場審査・生産物審査・農産物検査への全面対応
- ②混種事故防止対策
- ③種子栽培技術講習会への参加

④種子調製程度見本品の作成配布と調製程度確認会の開催

⑤種子病害防除への助成

⑥種子生産工程管理（種子GAP）の実践

⑦種子生産研修会

(3) 優良種子の安定供給

需要に応じた円滑な種子供給を行います。需給調整のため備蓄を行うとともに低温保管して品質確保に努めます。

主な実施事業

①種子需給計画の策定

②種子の品質調査（DNA調査・確認展示ほ設置）

③回転備蓄の実施と備蓄種子の品質調査・発芽確認試験

④消毒種子計画と供給

⑤温湯消毒種子に関する対応

⑥種子の残量処理と事故処理

(4) 種子生産体制の強化

種子の安定供給を支えるため、種子生産農家と採種ほ場面積の確保、JA種子センターの効率的運営、再生産を確保する種子買入価格の設定などに取り組みます。

主な実施事業

①種子生産者組織の現況調査と分析

②種子場農協交付金の交付

③種子センターの運営・管理支援

④生産費に基づく種子買入価格の設定

⑤優良種子生産部会の表彰

⑥種子生産体制強化現地研修会

3. 広報活動

関係機関等の指導者が生産者を指導する際に活用していただく目的で協会機関誌「とちぎの米麦改良だより」を発刊・配布します。

また、生産者や関心のある一般消費者向けに協会ホームページにて生産技術等各種情報を提供します。

田んぼ周りの生き物たち No.5

ホタルを観よう・守っていこう

塩山 房男

はじめに

ホタルはカブトムシと同じコウチュウ目の仲間、世界に2,100種、日本に40種以上、栃木県には、10種ほどが知られています。ホタルは、一般には水生昆虫の仲間とされていますが、ゲンジやヘイケ等、幼虫時代を水の中で過ごす水生ホタルは世界でも珍しい仲間です。また、ホタルは光りを放つことが常識とされていますが、全ての種が光るわけではなく、成虫が夜行性で約4割弱の種類しか光りません。但し、幼虫は多くの種が淡く光ります。光は、ルシフェリンがルシフェラーゼの酵素で化学反応し、熱は発生しません。

1. ゲンジとヘイケホタルの違い

体長はゲンジのメスが20、オスが15mm前後、ヘイケはメスが10、オスが8mm前後とゲンジの方が大きいです。飛び方は、ゲンジは川面から10m以上の大木まで悠々と数十メートル飛びますが、ヘイケは田んぼ周りの雑草や稲株あたりを、数メートル単位で地面すれすれを飛びます。

光りを放つ間隔はゲンジが2～4秒光るのに、ヘイケは0.8秒程度です。なお、飛びまわっているのはほとんどがメスを探すオスで、メスは草むらでオスを待っています。なお、ゲンジの発光間隔は、西日本では2秒で、関東以北では4秒です。

餌は、ゲンジがカワニナというやや中型の巻き貝を、ヘイケはサカマキガイやモノアラガイ等の小型の巻き貝を食べて育ちます。

住んでいる場所は、ゲンジは平地よりは中山間地の水がきれいな沢水・湧き水のある水田地帯の上流部に多く観られます。ヘイケは、平地の水田地帯で、多少水が汚れていても住むことが可能で、県内広い地域で観られます。



交尾中のゲンジボタル。大きい方がメス

2. 激減したホタル

ゲンジもヘイケも昔は平地の水田地帯でも普通に観られましたが、1960年代の農薬や水質汚濁問題、開発による湧水の減少等で激減しました。

1970年代後半以降は、低毒性農薬の普及や水質汚濁の改善で、一時両種ともかなりよみがえって来ましたが、ホタルの幼虫は7月に卵から孵化し、最初は小さな巻き貝を食べ、徐々に大きな巻き貝を食べて育ち、翌年4月の小雨降るときに土手を登り、水路脇の土の中でサナギになります。夏から次の年の春まで川や用排水の中で生活するため、冬に水が無くなることと、土の中でサナギになるため土手が土で無くなることは致命的です。

近年、基盤整備等でU字溝が普及し、開発等でも冬に湧き水が無くなって水が枯れ、さらに土手草の除草剤管理等が原因で絶滅したケースが大半です。特に平地に多かったヘイケでは、U字溝の普及とともにゲンジ以上に減少し、今では準絶滅危惧種になってしまいました。

3. ホタルを守る＝他の生き物を守ります。

冬に水が枯れることはメダカやフナ、或いは多くの水生昆虫、特に幼虫期間が3年と長いオニヤンマ、冬水の中で越冬するツチガエル等、多くの生き物が生きて行けなくなります。

ホタルを守るためには、一年中水が流れる小川の存在が必要で、このことは他の多くの生き物も守られ、地域の生物多様性が高まります。

なお、ホタルは地域によって遺伝子が異なるため、ホタル保全の目的で、他地域のホタルを購入して放す例がありますが、遺伝子の攪乱が生じますので、絶対に謹んで下さい。周辺地域のホタルを養殖して放すには問題がありません。



ゲンジボタルの幼虫

今年より当協会は公益社団法人に生まれ変わります。

皆様方には、当協会の事業運営につきまして、格別のご指導・ご協力を賜り、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、この度の公益法人制度改革関連三法の施行に伴いまして、当協会は公益社団法人へ移行すべく、所要の準備を進めて参りましたが、去る3月21日に栃木県知事より認可をいただき、平成25年4月1日に公益社団法人に移行致しました。

これを機に、役職員一同新たな決意をもって、主要農作物の優良種子の安定生産・安定供給に務め、会員並びに生産者の負托に応えられるよう鋭意努力して参る所存でございますので、今後とも尚一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

末筆ながら、旧法人にて賜りましたご厚情に感謝申し上げますとともに、会員の皆様と関係各位のご健勝とご多幸を祈念し、公益社団法人移行にあたってのあいさつと致します。

平成25年4月

公益社団法人栃木県米麦改良協会

代表理事会長 高橋 武

役職員一同